

『ウワサの王子様』

著：高月まつり

ill：こうじま奈月

旅行の支(し)度(たく)は、アルファードがすべてやっておいてくれた。

あとは理央が、自分で持っていきたい小物を用意するだけだ。

風呂から上がったばかりの理央は、ほこほこと頭から湯気を出しながらバスローブ姿で腕を組む。

「やっぱ、携帯だろ？ それと音楽端末にゲーム機。……あ、国際標準マナーの小(しょう)冊(さつ)子(し)も持っていこう。もしものときに役立つかも」

「嘆(なげ)かわいい」

背中に冷ややかな声をかけられて、理央は唇を尖らせて振り返った。

そこには、すでにパジャマに着替えたルシエルが仁(に)王(おう)立ちして腕を組んでいた。

「相手はイングランドの貴族だぞ？ ルシエル。今回の招待は外交と見なすべきだ。だから俺は、間違いのないように……」

「そんな物は必要ありません。あなたはすでに完(かん)璧(ぺき)です」

完璧な人に完璧と言われても、嫌みにしか聞こえません。

理央はしょっぱい表情を浮かべて、低く呻いた。

「作法は完璧、ダンスは普通。自然な会話は……改善の余地あり、と言ったところだろうか」

「数年前までは、俺は日本の庶(しょ)民(みん)だったんだ。生まれたときからセレブだった人間のようににはできません」

「できませんではなく、やるのです。よろしいか？」

「分かりました。では俺は、これから身の回りの物を片付けますので、どうかルシエルさんは自分の部屋に戻ってください」

理央は唇を尖らせると、ルシエルに背を向けて自分のデスクに向かう。

明日は七時起きだと言われているので、寝る前に準備をしておかなければ絶対に忘れものをする。

理央はゲーム機や携帯電話をバッグに詰め、アダプターも突っ込んだ。

「イギリスって、変電器があるのか？ オーデンと同じじゃなかったらどうしよう」

「必要です。オーデンは二二〇ボルトですが、イングランドは二四〇ボルトですから。お分かりか？」

「分かりました。分かったから、さっさと自分の部屋に帰れ」

理央は悪態をついたのに、ルシエルの腕は優しく彼を抱き締める。

「招待先で、こんなことはできない」

「別に俺は……その、エッチしなくてもルシエルが好きだ……。絶対にしなくちゃダメだと思っないし」

背中にルシエルの熱を感じる。

理央は、ルシエルの手に自分の手をそっと重ね、優しくさすった。

「あなたも、オーデン人の血を継(つ)いでいるのですから、私の気持ちを察していただきたい」

「明日は、朝……早いし……」

「私が起こして差し上げれば、それで済むというもの」

「ルシエルは我が俤だ」

理央よりも八歳年上のはずなのに、今は八歳も年下に思える。

ルシエルは、理央のため息交(ま)じりの呟きに低く笑った。

「笑ってる場合かよ。厳しくて我が俤な教育係なんて最悪じゃないか」

「だが、あなたの恋人だ」

「ダイヤー邸でもこんなだったら、大変なことになるぞ？ 『壁に耳あり障(しょう)子(じ)に目あり』、だ」

「ミミーにメアリー……」

まじめに呟かれて、理央は思わず嘖(ふ)き出した。

ルシエルも、理央に釣られて笑う。

「もう……仕方ないなあ。俺のロッテンマイヤーは、とんだ甘えん坊だ」

「……………ロッテンマイヤー？」

ルシエルが低い声で呟いた。

しまった。

理央は自分の失言に顔をしかめる。

ルシエルを陰(かげ)でそう呼んでいることは、誰にも秘密だったのに。

さて、どう言い訳をしようかと考えていた理央の頭上から、意外な言葉が返ってきた。

「殿下に、ハインリヒ以外のドイツ人の知り合いがいましたか？ 慈善パーティーのときの名簿にも、ロッテンマイヤーなる人物はいなかった……」

「え？」

もしかしてルシエルは、「アルプスの少女」を知らないのだろうか。有名なのは日本だけでなのかと、理央は首を傾げた。

だが、この場合は知らなくて「正解」だ。

「その人物は、ロッテンマイヤー夫人なのだろうか。それともロッテンマイヤー氏なのか。しかも、『俺のロッテンマイヤー』と言われた。……………浮気？」

このおバカさん……っ！

理央は眉(み)間(けん)に皺(しわ)を寄せ、ルシエルの手を強く叩いた。

「俺は、浮気をする暇(ひま)はありませんっ！ そして、ロッテンマイヤーという人間は実在しませんっ！ 創作物です」

理央は嘘はついていない。ロッテンマイヤーは、スイスの作家スピリが創作した人物だ。

「殿下の創作物……？ もしや、文才がおありか？ 私に内緒で書きためている物があるなら出なさい。知り合いの編集者に読んでもらいましょう。そして、物になると分かったら出版する。印税(いんぜい)は外交の予算に組み込めばいい。いや、大公殿下が書いた物と分かれば、それだけで売れるに違いない」

「ルシエル」

理央はくると体を回し、ルシエルと向き合った。

「そんな恥(はず)かしい出版の仕方なんていやだ。俺が書いたってだけで売れるって

ことは、文才は二の次ってことだぞ？ 全世界的に笑いものになる」

「申し訳ない。……で？ 書きためた創作物は？」

「どこまでも勘(かん)違いしてろ。俺はもう寝ます」

「そう簡単に寝かせるとお思いか？」

言うが早い、ルシエルは理央の唇に自分の唇を押しつけた。

乱暴なキス。

けれどすぐに、優しくて甘くなる。

理央はこの甘さに耐えられない。

「ん、んう……っ」

鼻に抜ける甘い声を出し、ルシエルにしがみつくしかなかった。

「恋人同士は恋人同士らしく」

「ゲイ疑惑のさなかに、ゲイ全開ですか」

「それはそれ、これはこれ。取るに足らない疑惑です。私たちの力でどうにでもなる」

そう言って微笑んだルシエルは、猛禽(もうきん)類(るい)の目をしていた。

プラチナブロンドの羽とすみれ色の目を持つ、大型猛禽。

理央は捕(ほ)食(しょく)される小動物だ。

ネズミはあまりにも可哀相なので、せめて野ウサギぐらいにしておきたい。

理央は、猛禽の巨大なかぎ爪で襲われた気分になった。

「可愛い殿下。……さて、ここからはプライベートな時間だ」

「い、今までは……なんだったんだよ」

くてんと体から力が抜けてしまった理央は、空軍で鍛(きた)えたルシエルに軽々と抱き上げられたまま悪態をつく。

ルシエルは笑みを浮かべたまま無言だ。

「オーデンの国民はのんびり穏やかで優しいから、ゴシップ紙を見ても『あらあら』で済ませてくれると思う。でも……イギリスは……」

テレビで、有名人たちが執(しつ)拗(よう)に追いかけているところを何度も見た。

自分がもし渦(か)中(ちゅう)の人になったら、上(う)手(ま)く切り抜ける自信がない。

理央は陰(けわ)しい顔のまま、ベッドにそっと寝かしつけられた。

「なんのために、俺がいつも傍(そば)にいると思うんだ？ リオ」

ルシエルが微笑みながら覆(おお)い被(かぶ)さってくる。

「あ」

「お前を守るのが俺の役目だ」

プライベートのルシエルは、「私」ではなく「俺」になる。

キザな台詞(せりふ)。

だが、ルシエルほどの美形が言うと逆にしっくり来る。

理央は嬉しそうに眼を細めて笑い、ルシエルの背に腕を回した。

「なんか……いい気分」

「俺は、ロッテンマイヤーが気になるんだが」

「忘れてください」

理央は笑いながら、ルシエルの頭を乱暴に撫(なで)で回す。

「あー……、そうだな、今は忘れよう。だがあとで、しっかりと説明してもらおうぞ」

事実を告げたら、きっとルシエルは形のいい眉をつり上げて文句を言うだろう。

理央は絶対に説明しないと心に決めた。

本文 p42～47 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>